平成20年度

病害虫発生予察特殊報　第１号

平成20年12月5日
茨城県病害虫防除所
Tel：029-227-2445

メロンえそ斑点病の発生について

病 害 虫 名：メロンえそ斑点病
病原ウイルス：メロンえそ斑点ウイルス　*Melon Necrotic Spot Virus* (MNSV)
発 生 作 物：メロン

1. 発生確認の経過及び県外での状況

（1）平成20年6月，神栖市の施設栽培メロンで，上位葉に円形の小斑点や展開葉に樹枝状のえそ症状を生じ，株元が褐変してしおれる障害が発生し，当所と関係機関で発生状況の確認を行った。
　被害株の症状からウイルスによる病害が疑われたため,茨城県農業総合センター園芸研究所において ELISA 法により検定したところ，メロンえそ斑点ウイルス（*Melon Necrotic Spot Virus* (MNSV)）によるメロンえそ斑点病と同定された。
（2）本病は1959年に静岡県で発生し，その後，日本各地で発生が確認されている。

2. 病徴

　葉や茎，果実，根等のあらゆる部分にえそ症状が見られる。生長点付近の若い葉には，黄褐色のえそを伴う小斑点を生じ（写真1)，展開葉では葉脈に沿って樹枝状に枯れこむえそ症状も見られる（写真2)。茎では茶褐色のえそを生じるが，表面だけにとどまり，内部にまで達することはほとんどない（写真3)。この症状は鶏の脚のように見えることから，通称「トリアシ」と呼ばれ，上部へ断続的に進展する場合もある。根は褐変し，重症の株は日中しおれる。果実の表面には大小様々なえそ斑を生じ（玉えそ)，果実の糖度は低く，肥大が不良となり商品価値がなくなる。

3. 伝搬方法等

（1）本病は種子，土壌及び汁液を介して伝染する。ハウス内での蔓延には，汁液伝染と土壌伝染が大きく関与する。汁液による伝染力は非常に強く，管理作業等による接触で容易に感染が広がる。土壌伝染では，土壌中のオルピディウムという菌が媒介し，ウイルスを保毒したオルピディウム菌がメロンの根に侵入することにより感染する。
（2）このウイルスは多くのウリ科植物に寄生するが，自然感染するのはメロンとスイカである。

４．防除対策

（1）乾熱処理等で滅菌された健全な種子を用いる。
（2）発病した圃場では，ソイリーン，ダブルストッパー（平成20年11月19日現在）による土壌消毒を行う。また，ウリ科以外の作物の輪作や，抵抗性台木の利用も効果がある。
（3）管理作業等による接触伝染に注意し，ハサミ等の器具や手指の消毒等を徹底する。
（4）発病株は早急に抜き取り，土中深く埋設する。
（5）多湿条件になるとオルピディウム菌の増殖が活発になるため，排水対策を行う。

写真１　生長点付近のえそ斑点症状

写真２　展開葉における樹枝状のえそ症状

写真３　地際茎部のえそ症状